

2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部	教授	佐々木裕美
最終学歴	学位	専門分野
愛知淑徳大学大学院文学研究科博士後期課程 単位取得満期退学	修士	米文学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

クレドは「学生が主役」です。

学生一人ひとりが、4年間の大学生活を自らプロデュースし、社会人基礎力を身につけるための支援をすることをモットーに、教育活動を行っている。

【目標】

学生一人ひとりが、目標を持って大学生活に取り組めるよう支援する。

正解探しではなく、結果に至るまでのプロセスを大事にする。

【方針】

知識を与えることのみでなく、知識を身につけたうえで「使う」そして「考える」ことを重視する。

【計画（方法）】

学生の学びが深まるノート術を使って、目的を持って学修に取り組む方法を提供する。

ノート術を通して、学生自らが課題を見つけ、考え、行動できるように支援する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、英語Ⅰ、アメリカの文化と社会

（後期）

基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、英語Ⅱ、日本の文化

○教育方法の実践

毎回の授業をA4のノート一枚にまとめ、学びを振り返る材料を提供した。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

滞りなくすべての担当科目を実施した。今年度は、ゼミと講義科目に加え、演習科目（英語）においても学生のノートテイキングを推奨し、それなりの効果を得た。

II 研究活動

○研究課題

1. 大学教育：「授業ノートの取り方を知ると、学生の問題解決能力が向上するか？」
2. アメリカ地域研究：近くて遠いアメリカ「グアム準州」

○目標・計画

【目標】

1. ノート術を使った学生指導を形にする。
2. リゾート地としての印象が強いグアム島の魅力と課題を明確にする。

【計画】

1. ノート術を授業内で活用し、結果を検証する。2024年度に引き続き、研究倫理申請を提出した上で、学生と一緒に活動を行う。徳島県立科学技術高校への出張を含む。
2. 主に総合演習と専門演習の学生と取り組む予定である。グアム島への出張を含む。(ゼミ旅行も企画予定)

○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

- ・佐々木裕美『『野生の棕櫚』におけるシャーロットの旅路の果て：アメリカン・デモクラシーの苦悩』 *Language & Literature (Japan)* 第33号 pp. 1-16（2024年12月、愛知淑徳大学大学院英文学会）

（学会発表）

- ・佐々木裕美『『野生の棕櫚』における囚われの身と自由の身—シャーロットに向けられる視線を通して—』 日本アメリカ文学会第35回中部支部大会（2018年4月21日、愛知大学名古屋キャンパス）

（特許）

（その他）

- ・グアム教育フォーラムにて基調講演「グアム教育フォーラム：可能性と課題」（2024年9月18日、名古屋国際センター）
- ・日本アメリカ文学会中部支部2019年度12月ワークショップ『And Then They Came For Us』司会・コーディネーター（2019年12月7日、南山大学）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

アメリカ学会、日本アメリカ文学会・同中部支部、日本ウィリアム・フォークナー協会、愛知淑徳大学大学院英文学会

○自己評価

研究活動全般に関しては、学会活動の比重が大幅に減り、授業の学びと振り返りのためのノート研究を重点的に行った。グアムへのゼミ旅行は、円安と米国入国規制により、行うことはできなかった。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

経営学部執行部および教務委員会の構成員として職務を遂行する。

【計画】

経営学部執行部では経営学部長のもと、教務委員会では教務委員長のもと、協力して職務を行う。

○学内委員等

経営学部執行部、教務委員会副委員長

○自己評価

職務を全うしたと思う。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

AFS 日本協会のボランティア、LA のロータリーサテライトクラブ会員として国際交流の推進に努める。

【計画】

異文化学習プログラムのファシリテーター、高校生の留学支援、もろもろの講座など、求めに応じて行う。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

(公財) AFS 日本協会終身会員、(公財) AHI アジア保健研修所終身会員

○自己評価

Satellite Club of Glendale Noon (5280 区) が当初の役割を終え、2025 年 6 月末をもって解散したのに伴い、同クラブを退会した。今後は、地域社会において身近な社会貢献を行っていく。

V その他の特記事項 (学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

VI 総括

学生を主役に据えて、学びのサポートに徹した。授業外では、様々な学生と、彼らの人生のひとコマを共に過ごせたことに感謝したい。これからも健康に留意して、学生の学びを支援する。

以 上